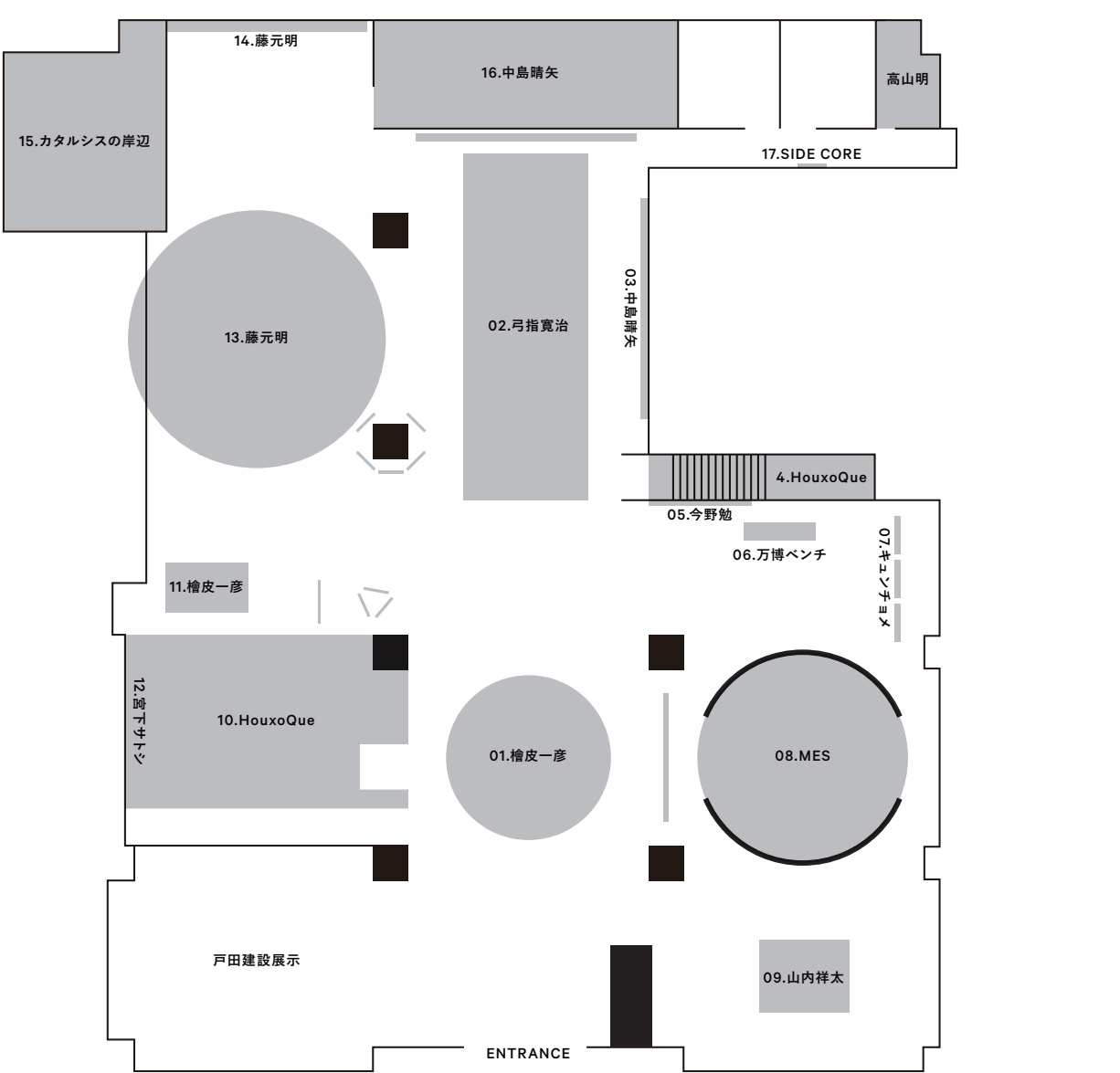


## SiteB「祝祭の国」

※本展は2会場構成です。Site Aの入り口は、日本橋方面に25mほど直進した左手にあります。



### 檜皮一彦

**01.hiwadrome : type THE END spec5 CODE : invisible circus | 2019 年**  
**協力 : 協力 : 株式会社コトブキ、コトブキシーティング株式会社**

**11.hiwadrome : type THE END spec5 CODE : radical dreamers**

白く塗られた車椅子を積み上げ、大量の白色 LED によって発光させた「塔」。この塔の前にあるのは、岡本太郎本人が造形した「太陽の塔」顔部分の模型。1970年の大阪万博で「太陽の塔」顔部分の施工を担当した「株式会社コトブキ」が所蔵しているものをお借りした。一見すると1970年の「反復」「再来」のように見えるが、よく見れば、そこには決定的な「ズレ」がある。

### 弓指寛治

**02. 黒い盆踊り | 2019 年**  
**白い馬 | 2019 年**

発光する車椅子の「太陽の塔」の裏側にあるのは、盆踊りを踊る人びとの列である。盆踊りもまた「祝祭」であり、私たちにとって最も身近な祝祭のひとつだろう。しかし、五輪や万博が「生者」のための祝祭なら、盆踊りは「死者」のための祝祭である。太郎の「太陽の塔」の裏側には「黒い太陽」の顔があったが、弓指はそれに対応させるように、影としての盆踊りを配置した。発光する塔に照らされた人びとは、生きて、死者のために踊る。しかし裏に回ると、塔は爆心地に変わり、人びとは炎に包まれ、焼かれている。影の道の先には、太郎の従軍時代のエピソードをもとにした《白い馬》がある。太陽の塔の影は、死者たちとともに、太郎自身の戦争の記憶にもつながっている。

### 中島晴矢

**03. パーリ・トゥード in ニュータウン ーエキスポー | 2018 年 | 映像 22 分 44 秒**  
**16.Shuttle Run for 2021 | 2019 年 | 映像 10 分 04 秒**

90年代の『ケンドー・ナガサキのパーリ・トゥード in 商店街!』のオマージュとして、2014年から制作しているシリーズの完結編。プロレスラーに扮した中島は、巨大な祝祭の跡地につくられた日常=「ニュータウン」を舞台に、自らの身体を賭して「パーリ・トゥード=なんでもあり」のバトルを繰り広げる。それはレスラーどうしの闘いではなく、どんな祝祭も呑み込んでしまう、分厚い日常との、勝ち目のない闘いである。

### Houxo Que

**04.un/real engine | 2019 年**

祝祭の足元から、静かに迫る黒い水。本展における祝祭と災害の関係を示す、象徴的なインスタレーションである。「ゼネコンの地下を水没させる」というアイデアからはじまった作品だが、解体前とは言え、まだ本社機能があり、テナントも入っているビルの一部を水没させるために、入念な計画と調整を要した。結果的に、絶対に水漏れがないよう、構造計算や防水対策を繰り返し、最も「安全」に配慮した作品となった。

### 今野勉

**05. 今野勉 | 日本万国博覧会 電気通信館展示プランに関する資料 | 1969 年**

1970年の大阪万博において、電電公社（現 NTT）のバビリオン「電気通信館」の展示プロデューサーを務める予定だった、今野勉による展示プランの資料。諸事情により、今野のチームは途中で辞退することとなり、幻の展示プランとなった。今野のプランは、東京の霞が関ビル前、京都の西陣織職人の仕事場、種子島の漁港の3ヶ所にカメラを設置し、電電公社が持つ全国のマイクロフェーブ網を使って、ひたすらその場所の日常を生中継し続ける、というものだった。「Tele - vision=遠くを見る」というテレビの本質に回帰しようとする今野のプランは、「動画の時代」「配信の時代」である現代の想像力を先取りする、きわめて先駆的なものであった。

### 万博ベンチ

**06.1970 年 所蔵 : 株式会社コトブキシーティング**

「ストリートファニチャー（街具）」とは、公共空間において、人びとが集い、憩うことができるようにサポートするものを指す。日本でこのコンセプトが本格的に導入されたのは1970年の大阪万博である。万博では、大量の観客が動員される。観客を収容するためには各バビリオンだけでは足りないため、丹下健三や磯崎新らの提案によってストリートファニチャーが導入されたのである。コトブキの「万博ベンチ」は、万博のために作られたストリート・ファニチャーのなかで最もポピュラーなもので、万博が終わったあとも、全国の公共施設で使用され続けた。

1970年の祝祭では、この万博ベンチのような数々の作品によってストリートが開かれ、人びとを受け入れた。来るべき祝祭において、はたしてこのような作品は生まれるだろうか。

### キュンチョメ

**07. 日陰の太陽 | 2015 年**  
**行方不明の太陽 | 2015 年**

北を向いているため、一日中まったく陽が当たらない「太陽の塔」の裏の顔、「黒い太陽」に、鏡を使って太陽光を反射させることで「目」を入れるパフォーマンス《日陰の太陽》と、全盲の人たちの瞳に映る太陽の姿を捉えた《行方不明の太陽》を、本展のために組み合わせせて配置した。  
※作家による解説キャプションも参照のこと

### MES

**08.HOTBEDS/ 温床 | 2019 年**

日本におけるクラブカルチャー前身である「ディスコ」カルチャーは、1964年の東京五輪の頃に輸入され、1970年の大阪万博以降に最盛期をむかえる。一方、現在のクラブカルチャーは風営法によるクラブ規制によって萎縮し、五輪、万博にむかって「踊れない国」となりつつある。クラブ規制をテーマとしてきたMESが、反復する五輪、万博の歴史のなかで、「ディスコ」の隆盛と「クラブ」の規制が対照的になっていることに着目する。  
※作家による解説キャプションも参照のこと

### 山内祥太

**09.Lonely Eyes | 2019 年**

ヘッドマウントディスプレイによるVR体験は、視界が覆われることによって外界から隔離され、自らの身体を置き去りにしてVR空間に没入する。山内は、私たちがここではないどこかへ没入し、凝視する時に現れる、置き去りにされた身体性それ自体を「彫刻」化しようとする。

https://www.youtube.com/watch?v=VzE90bqrrEE&feature=youtu.be

### Houxo Que

**10.un/breakable engine | 2019 年**

### 宮下サトシ

**12. 爆撃器 | 2019 年**  
**波魂像 | 2019 年**

Houxo Queによる解体された茶室のインスタレーションは、来るべき祝祭にむけて、ますます流布されることになる典型的でオリエンタルな日本イメージに対する「Bomb」である。一方、茶室の押し入れに置かれた巨大な黒い器は、一度瓦礫にして焼成した陶片を再構成し、漆喰で固めたもの。

### 藤元明

**13. 幻爆 | 2017 年**  
**14.2026 | 2019 年**

円形の鉄パイプと銀色のテープで作られたシンプルなオブジェが、強い光によって、着弾の瞬間を幻視させる装置に変わる。大友克洋の『AKIRA』から着想を得たという本作は、64年五輪と70年万博に先立つ、最大の災害である原爆を想起させる。そして、会場を解体する際に出た瓦礫を用いて作られた「2026」は、祝祭の本質からどこまでも離れてゆく祝祭に対する不安を、ストレートに表している。

### カタルシスの崖辺

**15. カタルシスの崖辺 | 2019 年**

屋台という形式であらゆる人々のローカルディスクに眠る「死蔵データ」を回収し、販売しているアーティストグループ、カタルシスの崖辺は今回、「祝祭」をテーマにした会場から出た瓦礫が山のように積みれ、押し込められた一室を使い、回収した死蔵データで満たした。解体され、破棄されてゆく瓦礫と死蔵データはともに、忘れられた記憶装置であり、祝祭の裏側に作られたこの密室で、ひっそりと再生されるのである。

ビルの解体というと、ある男のことを思い出す。我々が今まさに展示しているここ、戸田建設本社ビルは、建て替えられることが決定している。2019年内に既存建物の解体工事に着手する予定で、2021年の着工、2024年には地上28階、高さ173mの超高層ビルが完成する予定らしい。赤瀬川源平の「路上観察学入門」の中には一木努という男が登場する。一木は建物の「カケラ」を蒐集していた。彼は歯科医でありながら、仕事の合間に時間を見つけてはあらゆる解体現場に入りし、解体され消えゆく建築の「カケラ」を譲り受け、集めていた。入念なりサーチと、何度も現場を訪れ作業員やオーナーと交渉する姿勢は、生粋の蒐集家といえるし、少しでもアーティストっぽいなどもある。一木は、20年間にわたり蒐集活動を続けた。「カケラ」の内容は手すりや装飾、瓦礫など様々で、集めた数は650点以上に及ぶらしい。現場への真摯な姿勢と、金銭で解決せずに、交渉を楽しみあくまでタダで「カケラ」を集める一木のスタイルには、「死蔵データ」を蒐集する「カタルシスの崖辺」の一員として、尊敬の念を抱かずにはいられない。カタルシスの崖辺は、屋台という形式であらゆる人々のローカルディスクに眠る「死蔵データ」を回収し、販売している。そして、それらの死蔵データの大半は、作品制作の為に撮影、録音、執筆、取材したものの、使われなかったデータたちだ。建築物が解体されて瓦礫の山になり、さらに細かくなって資材にリサイクルされ、資本主義の下で循環の渦に返っていくとき、その循環から逃れた建物の「カケラ」たちは資料としての価値も持つだろうが、一木個人にとっては、その建物の記憶装置であるようにも思える。そして我々が集めている「死蔵データ」もまた、そういった記憶装置のように思えてならない瞬間がある。「死蔵データ」は、作品にはならなかったという意味ではある種の不純物だが、一方で作品に思いを馳せる特別な記憶装置にも成り得るはずだ。一木が建物の「カケラ」を蒐集するかのように、カタルシスの崖辺は「死蔵データ」を蒐集しているのかもしれない。

「祝祭の国」を作るために取り扱われた建物の一部だったもの達が、天井に届かんばかりに押し込められた部屋の中で、我々は、瓦礫の山を「カケラ」に見立て、その中に「死蔵データ」たちを並置し、「カタルシスの崖辺」という心象風景、架空の土地を設定する。それはマテリアル・ショップを自称してきた我々が、なぜ「死蔵データ」に惹かれるのかという、マテリアル・ショップ以前の問題意識を掘り下げたものであるといえるかもしれない。我々は祝祭と災害の狭間の、瓦礫の山が詰まった一室で、「カタルシスの崖辺」という死蔵データが漂着する浅瀬の発現を夢想している。

### EVERYDAY HOLIDAY SQUAD(SIDE CORE)

**17. Memorial Rebirth | 2017 年**

このキース・ヘリングの落書きは、渋谷の某所に今も残されている。とあるグラフィティライターが重なりあう偶然の中で発見したもので、公には知られておらず、グラフィティライター達の中だけで秘密裏に共有される「街の記憶」である。この作品は、その落書きをトレーシングペーパーでなぞり、反転させている。作品年号は1986年で、ポップショップをオープンする視察の為に来日したキースヘリングが描いたものと記録から判明している。公に知られてしまえば、たちどころに切り取られ、売り飛ばされてしまうこの落書きを、秘密にしたまま記憶し続けるために制作された。